



TITLE:

<大會抄録>成化朝初期における吏部権限縮小論をめぐって

AUTHOR(S):

阪倉, 篤秀

CITATION:

阪倉, 篤秀. <大會抄録>成化朝初期における吏部権限縮小論をめぐって. 東洋史研究 1991, 50(3): 482-483

ISSUE DATE:

1991-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154367>

RIGHT:

材に、州アンジョマンの實態解明を試みる。まず新聞發行にまつわる基礎的データを紹介した上で、州アンジョマンの討議と活動の基本的パターン、州知事を頂點とする舊來の權力構造における州アンジョマンの法制的位置と實相、州アンジョマンと他の社會階層、社會集團との相互關係、などを取り上げる。これらの検討を通じて、立憲制施行が地域社會にもつていた意味を考えてみたい。

ヒムヤル王國トゥツバア朝の性格について

部 勇 造

前イスラーム期の南アラビアに關する傳承を記した中世のアラビア語史料によると、西曆二〇〇年前後からこの地のヒムヤル王國は、トゥツバア朝と呼ばれる強力な新王朝によって支配されていたという。從來の研究者達はこの王朝を、當時の碑銘文史料より知られる實在のヒムヤルの王朝に比定しようと試みていずれも失敗した。ところで同じく碑銘文史料によれば、まさにこの同じ時期に、紅海の對岸のアビシニアよりアクスム王國軍のアラビア半島への進出が始まっている。彼等は南アラビア諸王國間の争いに巧みに乗じて勢力を伸ばし、三世紀末に實現したヒムヤル王の南アラビア統一にも一役買ったのではないかと思われる。そこで試みに、アラビア語で傳わるトゥツバア朝の王の名を、ゲズ語で傳わる同時期のアクスム王の名と比較したところ、多くの場合前者は後者のアラビア語譯であることが判明した。つまり傳承上のトゥツバア朝の支配者

の多くは、實は歴史上のアクスム王であった譯であり、そこからイスラーム化に先立つ數世紀の間、ヒムヤルはアクスムの宗主權下に置かれていたのではないか、との假説を立てることが可能になった。本發表では、さらにこの説の傍證をいくつか挙げるとともに、このアクスム・ヒムヤル關係が、前イスラーム期の西アジア史において有する意義にも言及する。

成化朝初期における吏部權限縮小論をめぐって

阪 倉 篤 秀

成化朝の初期、四年二月御史大夫戴用によって六項目の上奏がなされた。うち三項は吏部に關わり、「精考察」と題するものは、朝覲考察において從來の吏部・都察院に加えて巡撫による實地調査をもとにした考察を並行的に行うこと、「公薦擧」では、當時吏部が掌握していた在京堂上官ならびに方面官の人事を、内閣及び各堂上官の推薦・協議に委ねること、「均爵賞」では、人事面で吏部屬官の優遇を是正するよう提言している。ここには吏部權限を抑制しようとする意圖が認められるが、それにもまして成化帝は「公薦擧」での提言内容をさらにすすめて、在京四品以上の官は皇帝特簡に、方面官については保舉制を採用するとした。これが内閣の意向を反映したものであったことはいうまでもないが、吏部にとっては權限の縮小に直接つながる重大問題であった。にもかかわらず、吏部には表立った對抗の動きは見られず、かろうじて御史大夫劉璧が

吏部の存在理由、特簡・保舉制を採用することによって生じる弊害をあげて反論したものの、それとて祖宗の先例を盾にする再反論にあつてあえなく撤回されてしまうのである。

明朝においては吏部権限は大枠での規定はあるが、決して固定したものではなく、内閣と吏部との力關係が大きく作用した。ここにも一連の動きも、官界の状況を利用しながら吏部権限の縮小を圖る内閣の姿を如實に現すものであるとみることが出来る。

東晉の母后臨朝と外戚

安田 二郎

東晉代、一、成帝即位當初、二、穆帝即位當初、三、哀帝晩年、四、孝武帝即位當初と都合四回、皇太后臨朝稱制が實施されており、東晉政治史の特色の一に擧げ得る。しかし、最初の明帝庾太后にしろ、また三度にわたつて國政を裁斷したはずの康帝褚太后にしろ、自身が實權を行使した形跡は認められず、この點は、母后臨朝につきものの官官の活躍が全く見出されない一事にも徴し得よう。その時々における緊要の政治課題に對處するために擇ばれた具體的政策そのものであつたことをうかがわせる。わたくしは、さきごろ、最後の例をとりあげ、謝安によつて強行された褚氏三度目の臨朝が、巨大な勢力を保持する桓氏抑制を目的として實施され、それと同時に成立した謝安政權が、謝安と褚太后との血縁關係を基礎とした一種の外戚政權にほかならないことを論じた。西晉王朝の政

治・社會を律した「親親」が依然として重要な秩序機能を果していたことを示している。が、そのあり方を西晉の外戚と比較した時、ちがいは小さくない。本發表では、さかのぼつて初めの二件をとりあげ、特にその實施に至る前史に注目して分析を加え、該時期外戚の姿を通して、元來「八王集團」に屬する元帝Ⅱ東晉政權の成長という問題を考えてみたい。

アフガニスタン國ピアル・ヘル村より

見たるアジア史

勝藤 猛

一九七〇年に私は東大調査隊の一員として、アフガニスタンの二箇所の農村について、それぞれ異なる一箇月、村内に住んで調査を行った。

記録・大野盛雄(隊長)『アフガニスタンの農村から』(岩波新書)

當時、同國は國王ザーヒル・シャー治下、國內外とも平和

(一)カバビヤン村 同國西部 ヘラート東郊外 タジク族

(二)ピアル・ヘル村 同國東部 カーブル南方 パシクトゥン族

ピアル・ヘル村とその調査の特色

ひとつの村を總體としてとらえるのが調査の目的

都市や村から遠く孤立した村、農村としての性格が鮮やか
二本のカレーズで灌漑される、人口三六五人、これ以上は養えな